

『善光寺縁起』の疫癘表現

—『請観音経』から『善光寺如来絵伝』へ—

吉原 浩人

東晋・竺難提訳『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』（以下『請観音経』／本経）一卷は、『大正新脩大蔵経』で四頁ほどの短い経典であるが、雑密系の独立した観音経典としては最古のものとされている。本経は、世尊が毘舍離国菴羅樹園大林精舎に住していた時、疫病の流行があったため、月蓋長者と五百の長者は、世尊に病苦からの救済を求めたところ、西方の無量寿仏と観音・勢至の二菩薩が、十念のうちに門闥に出現し、大光明を放つて病苦から救済したと説く。本経は、疫病などの諸難から免れる方法を説くため、日本では奈良時代から受容され、平安時代には疫病退散のために宮中などで読経された。さらには、天台宗の楊枝浄水供の所依の経典としても知られ、京都市蓮華王院三十三間堂の「楊枝のお加持」は正月の年中行事として著名である。また長野市善光寺本尊阿弥陀三尊像の縁起は、本経を換骨奪胎して組み込んだものであり、生身信仰の流布ともに、平安時代以降広く知られることとなった。これに関して、私はかつて「『善光寺縁起』の生成—『請観音経』との関係を中心に—」（『国文学 解釈と鑑賞』第六三卷二一—号、一九九八・一二二）、「楊柳観音と月蓋長者—中国・日本における『請観音経』受容の諸相—」（林雅彦編『絵解きと伝承そして文学—林雅彦教授古稀・退職記念論文集—』、方丈堂、二〇一六・一）を公表している。

本発表では、これらを踏まえ、以下のことを明らかにしたい。（１）『請観音経』は、中国・日本において、疫癘退散のために読経され、あるいは懺法の所依の経典としても用いられた。その受容形態について、前稿で言及しなかった部分を中心に、その意義と諸相を述べたい。（２）『善光寺縁起』には、平安後期から江戸期まで、数々の伝本が存在する。ここでは特に、古代・中世に成立した縁起、あるいは聖徳太子伝などの関連文献や金石文の中から、疫癘に関する表現を抜き出し、その諸相と典拠を説明していきたい。特に、室町時代の四巻本真名縁起には、五色の鬼神や五種の温病について詳細に述べるなど、疫癘とその治癒に関する描写に多く紙幅が割かれている。その表現は何に由来するのか、闡明していきたい。（３）『善光寺縁起』を絵画化した『善光寺如来絵伝』は、中世に制作されたものが八種現存する。その中に、インドと日本における疫癘が、どのように描かれているのか、またその表現はどこから来るものなのかを詳細に検討し、その特徴を論じていきたい。『善光寺如来絵伝』の中には、槌で病人を打つ疫鬼が描かれるものがあるが、その由来についても究明したい。

キーワード…『善光寺縁起』・『請観音経』・『善光寺如来絵伝』